

美しい国の教育について —安倍首相にこたえる—

On Education for a Beautiful Country: Answering to Prime Minister Mr. Abe

上田 邦義
UEDA Kuniyoshi

Abstract: Premier Shinzo ABE, in his book *Utsukushii Kuni-e (Toward a Beautiful Country)*, July, 2006), declared that he is a fighting politician and he would change *The Constitution of Japan* and *The Fundamental Law on Education* as they were made under the rule of the Allied Powers soon after the World War II. His main motive of changing the *Constitution* is rewriting Article 9 concerning the abandonment of military powers, accepting the requests of U. S. government, so that Japan is allowed to possess the military forces and use the right of collective self-defense as well as be able to send them overseas as PKO which is now prohibited by the article. This essay discusses Mr. Abe's ideas relating to what a beautiful country means and what true education should be, criticizing his nationalistic political ideas following President Bush's foreign policies depending on military powers, which have proved to be failures in Iraq. The writer, referring to Abraham Lincoln's words: "In the present civil war it is quite possible that God's will is different from the purpose of either party" ("Meditation on the Will of God" September 1862), and Henry Thoreau's "I have never quarreled with God" uttered on his death-bed, and R.H. Blyth's: "the great-souledness, the ideal man towards whom we must consciously strive and from whom a good society is unconsciously created", concludes that Mr. Abe should hold the spirit of the "Peace Constitution" and also establish diplomatic relations with North Korea that would lead to the disappearance of threat of nuclear wars with one result being that the Japanese students will study hard to contribute to the peace and happiness of all people in the world.

Key words Premier Shinzo ABE, a beautiful country, "Peace Constitution of Japan", Article 9, Abraham Lincoln, Henry Thoreau, R.H. Blyth, peace and happiness education, life together with nature

安倍晋三、美しい国、平和憲法、第9条、リンカン、ソロー、ブライズ、「絶対平和」、「万人の幸福」、「自然との共生」

第一章：教育とは何か

子どもたちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。
神の国はこのような者たちのものである。

「マルコによる福音書」10の14

はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人で
なければ、決してそこに入ることはできない。

「同」10の15

「知情意」の中心は「情」、「心技体」の中心は「心」

安倍首相が、「教育基本法」改定の委員会審議で、日の丸・君が代に関連して、「愛国心を強制し、それで成績をつけることになるのは望ましくないのではないか」という質問に答えて、児童生徒の心までは評価しない、態度を評価するだけだから問題ない、と答弁しているのがテレビで放映されていた。つまり、形が整っておれば、心は問題にしない、というものである。心では納得しようがしまいが構わない、定められたことをやりさえすればよいという。しかしこれは最も非教育的な考え方である。これはクエーカリズムや禅の見方からすれば、最も非宗教的である。靖国参拝の形式にこだわるのもそのせいだ。「心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん」が、日本人の心情と思うのだが。

確かに首相のような発想の宗教思想もあり、それを好む人たちもいる。決めてくれればそれをやります、という。『中央公論』2007年3月号で、曾野綾子氏が述べておられたのも、同様の考え方であった。「キリスト教の愛は『心から』でなくていいのだ。それよりむしろ『理性の命ずるところに従って・・・』なのである」。そしてそのよってくる所を次のように説明しておられる。

「真心から、などというものを、私は実はずっと昔から嘘くさいものだと感じていたのである。・・・嫌いな人をどうして俄かに愛せるだろう。しかし愛していなくても、愛しているのと同じように接しなさい、その理性の行動こそがほんとうの愛なのだ、と教えられれば、私にはそれで充分であった」と。

そのように教えられた結果、「私の中には、同時に一つの姿勢ができていたことも事実であった。それは『現世のことはどうでもいいや』という感覚である」と書いておられる。

以上は、曾野氏が上記『中央公論』に掲載された「真実を『神のみが知る』喜び」からの引用である。小見出しが、「カトリック的教育」から始まっているところから、これはカトリック的教育について語られたものと推測される。

また、氏はその著書のなかで、「教育とは強制から始まる」と述べておられる。

私には、曾野氏が受けられたような、そのような教育は、本当の教育とは思われない。そ

それは最も大切であるべきはずの一人ひとりの心を尊重せず、納得しようがしまいが、教えられたら、それに従えばいい、という。それは管理者的発想から来るものとししか考えられない。どちらかといえば人間性悪説に立つもので、美しい心（のあるなし）を初めから無視している。子どもには善悪の判断など出来るものではないという見方もあるが、イエスが言う如く、美しい心を持っている子が多いと思うのである。また大人やある組織の判断が絶対正しいとも言いきれないのである。一方的に善悪の判断を押し付け、ある行為を強制することは、子どもの美しい心の芽を摘んでしまい、美しい心を生かせるような社会をつくろうという、意欲をそぎ、失わせることになる。人はそれぞれ異なるものなのに、無理やり同じことをやらせることになる。子どもにしてみれば、自分はそう思わないのに、そう覚えろとか、文句を言わずにやれ、という非合理とししか思われぬ。何が正しく何が間違いか、分からなくなり人間不信となる。児童生徒の美しい心を蹂躪^{じゅうりん}し、繊細な子どもたちを学校嫌いにし、不登校に導くものである。以上は、私がこの小文において、最も訴えたいことの一つである。

「知情意」の中心に「情」があり、「心技体」の中心は「心」である、というのが日本人の最も納得の行く受け止め方である。フランスでもアメリカでも、カトリック信者で禅の道場へやってくる人が多いという。カトリックの儀式を嫌い、ただ静かに座禅を組んで瞑想する。心の落ち着きと感情の整理のためにやってくるのだという。そして宗教を求めてではなく生きる目的をはっきりさせるためだという。曾野氏の教育観も、受けられた教育がカトリックの儀式のように、幼い純真な心を尊重してくれなかった結果の反応ではなかったろうか。

美しい教育環境

学校の自然環境と校内環境は美しい、楽しいものになっているであろうか。心身の健康を害するような状況にはなっていないであろうか。学校の周りの自然環境は美しいであろうか。校長をはじめ、教員たちは人生の先輩として、生徒にとって好ましい存在であるであろうか。また、学校は社会を映す鏡であってはならない。学園にふさわしい理想社会の雰囲気を作り出す場所でなければならない。校長は、それを目指すタイプの人間であろうか。クラス担任は生徒全員に目配りできるような状況になっているであろうか。少なくとも中学までの教育は、基礎学力だけではなく人間教育こそ大事である。学園はそれにふさわしい雰囲気を備えている必要がある。教職員は生徒一人ひとりの心理状態を考えて、それを尊重し、無理に規則で縛ろうとはしていないであろうか。

教員は自らも絶えず向上すべく勉強できる環境にあるであろうか。教員になる資格を取得するときに勉強した「憲法」「教育原理」「教育心理」「児童青年心理」「教科教育法」などの教材を、時には読み返し、また新たに研究しなおす必要がある。教員の自己研修は絶えずなされなければならない。互いの授業の自由参観が必要である。

高校大学の教員も教科の専門家というだけではなく、何らかの人間的な魅力を持ち合わせていたい。それなしには、教師として十分ではないと考える。幼稚園・小学校では先生に憧

れていた生徒たちが、高校大学と進むにつれ、それがなくなるのは残念なことだ。この年齢の学生たちが、教師に理想の人間像を垣間見ることもあってほしいものだ。

学校給食は楽しいものになっているであろうか。食材やその容器は安全であろうか。自然食の普及はまだアメリカに及ばないようだ。日本ではまだ値段も高く、同じ価格では買えない。大学でも自然食の食堂がまだ普及していない。しかし自然食の家庭は増えている。

学校では教員の喫煙は減っているであろうか。少なくとも校内禁煙になっているであろうか。子どもたちは喫煙は公害であると知っている。最近、校舎外も含めて全面禁煙の学校も増えている。教職員は規則によってではなく、自らを律すべきであろう。

教員の側の言行不一致、教えることと実際の生活とのくい違いが、子どもたちを悩ませていないであろうか。学園は現実社会の反映ではなく、理想社会を目指す小社会であってほしい。暴力否定や協調性や自主性をモットーにしているはずだ。学生にとって教員は理想を語る存在でなければならない。社会人教師はそれがわかっているであろうか。教育委員会その他の機関はそれを理解し、学園と良好な関係を保っているであろうか。

理想的な教師は、科目の教師であれ、部活の指導者であれ、すべて理想主義者である。優れた教師は、これまでの慣習や、自分の受けた教育などに縛られてはいないであろう。恩師たちを乗り越えようとしているであろう。さもなくば、人間の進化も社会の進歩もありえない。

私はほぼ半世紀、教師を勤めてきた。しかし未だに日本の学校教育、科学万能主義的な教育を本当には信用していない。人間主義になっていないのだ。多くの教科書、多くの教師の教えていることが信用できない。朝永振一郎先生が「証明されていない世界に関しては、科学者には発言権がない。例えば死後の世界に関して、存在しないとは言えない」という意味のことを言っておられた。教育においては、何事に関しても、決め付けないでほしいのだ。「教育とは自由な教育のことである。戦時にあっては教育はなりたたない」とは矢内原忠雄東大総長の言葉であった。

私は、日本の教育の、目標や理想のなさ、試験のあり方、教員採用のあり方、教科書認定のあり方、その他政府のやることが、未だに信用できないでいる。いじめ問題にしても、20人学級にして教員のゆとりを作れば、かなり解消されとわかりきっているのに、行政はそれに気が付いていないのだろうか。そんなはずはあるまいと思う。なぜ教員を増やさないのか。私はアメリカやカナダでは、保育園から大学院までいろいろ見たり教えたりした。1970年代と80年代のことであるが、高校までは1クラス20人以下のクラスしか見たことがない。そして幼稚園でもクラスが2つなら、教師は3人で、順番に一人は空き時間になる形であった。英語の出来ない私の子どもには、幼稚園の費用で補助教員をつけてくれ、教室では横に座っていた。

教員にゆとりがない現状で、種々の問題が解決されるとは思われない。ゆとり教育とは、生徒だけではなく、教員の側のゆとりであってほしかった。多くの教員が会議や書類作りに

追われる現状は一刻も早く解消されなければならない。そのためには、管理者や事務長ではなく教員を増やすことである。そして校長には柔軟性や創造性がほしいものである。

教員同士が気軽に話し合う自由な時間がほしいし、また教育目標や技能の向上のためには、お互いの授業をいつでも見せてもらっていいという、自由参観の雰囲気がほしい。多額の予算を取って、何十時間とかの研修を義務付けるよりも、そのほうがよほどいい研修になるはずである。教員同士の自由な授業参観である。

さらに教員各自が、自分自身の研究テーマをもち、どんな研究会や学会もしくは集会であれ、そこで研究（体験）発表するのがいいと思う。それは彼または彼女の生活の一つの支えになるだろう。これがあれば、どんなに生活と教育に忙殺されても、逆に心の余裕をもって、時に教員としての自分を客観的に眺め、てきぱきと授業でも、会議でも、事務処理でも仕事に当たれるのではないかと思う。教員はすべて週一日の研究日がほしい。校長や副校長も研究者であるのが望ましい。

いじめはなぜなくなるのか

おもひ すべて
意 は諸法にさき立ち
すべて おもひ
諸法は 意 に成る
おもひ よのこと す
意こそは萬象を統ぶ
おもひ
きよなる 意 にて
か か おこな
且つかたり 且つ 行 はば
形に影のそふごとく
たのしみ彼にしたがはん

ほくくぎょう だいいつぽん
『法句 經』第一品

学校は社会をそのまま映す鏡であってはならないのに、現実には世界情勢を反映している。2001年9月11日の「同時多発テロ」に対するアメリカ政府の「戦争」対応は、「共生」社会を目指していた世界の目標を一気に打ち砕いてしまった。なぜテロが起こったか、原因を考えようともせず。まして、弱者への思いやりなどは、思いもよらず。

戦争という悪事を政府が肯定している限り、子どもたちのいじめや暴力や銃の乱射などが、決してなくなりはいしない。政府もそれが分かっている、銃規制をしない。たいしたこととは思っていない。むしろこれをわが方に都合よく利用しようとしているようだ。戦争肯定の候補者に大人たちが投票している限り、子どもたちのいじめはなくなる。

アメリカ政府さえその間違いを認めたイラクに対する事実誤認を、日本政府はいまだに（2007年4月現在）間違っていなかったと言い続けている。日本の子どもたちが、政治家の言うことを、信じないのもおかしくはない。現実の大人社会が間違っているのである。醜い大人社会に耐えられない子どもたちは、むしろ正常である。優しく対応してあげなけれ

ばいけない。さもなくば、彼らの狂気は癒されないであろう。

用語の問題

安倍首相は、外交関係の使用用語に、しばしば戦闘に関する「戦略的」などの語を用いられる。最近の日中関係においてもそうであるが、初の欧州訪問においても、訪問中の記者会見で、たびたび「戦略的パートナー」という言葉を使われた。現地の通訳や報道がこれをどんな言葉に訳したか定かではないが、戦争または闘いのイメージを含む言葉である。相手国の国民はこれをどう受け止めたであろうか。平和愛好国の首相として、「戦略的」は不適当な表現である。二度と戦争を起こさぬようEU（欧州連合）を結成したEU諸国の国民は「戦略的パートナー」と言われて、意外に思ったようだ。武力による平和維持を考えているのかと、恐怖を抱いた人々も多かったのではないか。この60年間、平和を維持し、今後は世界の平和維持に積極的に関わろうとする意気込みは分かるが、敵国を仮想し、戦闘を予期したとも思われるこうした言葉は使うべきではない。

首相はその著書『美しい国へ』の冒頭でも、政治家には「闘う政治家」と「闘わない政治家」があると、自らを「闘う政治家」として得意気である。「わたしは、つねに『闘う政治家』でありたいと願っている」という。この言葉がそのまま外国語に訳されたなら、首相の真意は伝わらない。まさか本気で、武力による平和維持を考えているわけではあるまい。武力開発競争の未来を考えたとき、この発想は正しくない。原爆製造にたずさわった物理学者たちが、その人生の晩年には平和運動家になった事実は、何を物語るか。

日本は戦後60年、平和維持を最重要課題とし、諸外国との友好親善に努めてきた。国民の多くは、武力によらない「絶対平和主義」で行きたいと願っているのである。ここで軍国化を暗示させるような言葉を、日本国の代表として、決して使ってほしくない。平和に向けて世界をリードする指導者として、こうした言葉を使うことは極めて不適当である。

教育を最重要課題とする安倍首相に、このような極めて非教育的な「美しくない」言葉を使って欲しくない。それは日本中のみならず、世界中の教育関係者の願いであろう。

武力による平和維持が不可能なことは、ブッシュ政権のイラクでの失敗から明らかである。世界中がそれを知った。しかし最近の安倍首相の言動は、彼のそれを思わせるものがある。その言動が、その場逃れに見える。それが「戦う政治家」であるなら怖い。まさか、武力による平和維持が本心のはずはあるまい。しかし国民はそこが怖いのだ。

態度の問題

2006年末の「教育基本法」改正審議において、「生徒たちの愛国心に成績をつけるのか」という質問に対して、首相は「心までは評価しない。態度だけ」と答えていた。この答え自体がきわめて非教育的であるが、ここで問題なのは、そのようにして法案が国会を通った後の、2007年4月の「教育再生特別委員会」では、「愛国心」を早口に付け加えたこと

だ。都合の悪いことは早口で言ってしまう首相のクセは、本人は気がついておられないであろう。しかしテレビを見ていた国民の多くは、これに気がついている。首相の品格にかかわることだ。

愛国心そのものが悪いとは、国民は思っていない。それが強制されたものでなく、自然なものであればそれは自然の情であり、美しいところもある。美しくないのは首相のその手法である。多数決で押し通そうという横暴な、強引な手法が見えてくる。有無を言わず国民に納得させようという。強制国家や武力国家は美しい国ではない。日本を最近のアメリカのような、いつどんな攻撃をされるかわからない不安と恐怖の国と化してほしくない。

『敗北を抱きしめて』の著者、ジョン・ダワー氏（マサチューセッツ工科大学教授）が言っている。「今のブッシュ政権には、国際法や国際裁判に対する関心も尊敬も感じません。捕虜虐待で連合軍は日本の将兵をB C級戦犯で裁き、多くの日本の人が死刑に処せられました。イラクで同じことを今度は米軍がやっています。米国は、自らが主張した理念を裏切っているのです。しかも、日本政府は、そうした米国の行動を批判しようとはしません」

長崎市長が銃撃射殺された直後の首相のコメントは納得がいかなかった。「真相究明して欲しい」「それが分からなければ、ほかにコメントのしようがない」といった態度である。「暴力は絶対いけない。いかなる理由であれ許されない。国民は皆その決意を新たにしたい」というリーダーとしての常識的な発言がない。そして被害者を守ろうという発想が首相にはない。個人的な問題に矮小化してしまおうとしている。暴力は悪だという態度が見えないのだ。長崎市長殺害に対する発言は、その一つの象徴であった。自民党元幹事長の自宅兼事務所が放火されたときにも、首相のアンフェアな発言が問われた。暴力から被害者を守ろうとする意気込みが見えないのは、フェアな（美しい）日本の首相にふさわしい態度ではない。心はそうではない、と言われるであろうか。もしそうなら、それを言葉に表して欲しいのである。そして行動してほしいのである。

第2章：美しい国の教育

共和党も民主党も、その意図するところが神の意志にかなっているようには思われない。

エイブラハム・リンカン「神の意志についての黙想」

「教育基本法」改定

平成18年も残り少なくなってきたころ、憲法改正を目論む政権の、『教育基本法』改定の審議のやり方に「美しさ」は感じられなかった。そしてその強行採決という手法に、恐ろしささえ感じたのは私だけではあるまい。

参議院特別委員会で、与党が審議打ち切りを提案し、野党が抗議する中、『教育基本法改正案』は強行採決された。そのときの、日ごろ暴力や「いじめ」否定を説く文科大臣の、情けなさそうな表情を、私は忘れることができない。その胸中察するにあまりあるものであった。「なぜここで待ったをかけないのか」と思ったのは、私だけか。教育に関する法案を、こんな乱暴なやり方で通していいものか。それはテレビを見ていた日本国民大多数の心情ではなかったか。しかも首相はこれを平然と眺めておられた。それは子どもたちには見せられない光景であった。これが倫理・道徳を教えようという日本の指導者たちの姿なのである。

引き換え、防衛庁の省昇格関連法案が可決されてゆくときの、長官の「わが意を得たり」の表情は、実に対照的であった。こうした光景はメディアを通じて世界中に伝えられ、日本の悪しきナショナリズムの台頭と、再び危惧を抱かせたのである。首相は「美しい国は強くなければならない」とも言われた。私は「美ほど強いものはない」という発想はもっているが、総理の「強さ」は武力を連想させるものである。多くの国民はそれを心配していると申し上げたい。

アメリカは自己の幸福追求

米国は 1776 年の『独立宣言』の中で、自己の「幸福追求」(pursuit of happiness)を人間にとって第一の基本的権利とした。自らの利益・幸福のために競い合い、争い、紛争や生命の危険に際しては、まず自らの命を守るのが当然としたのだ。そのためには相手を殺すも止むを得ないと。この基本的な考え方はいまだに変わっていない。それが 2001 年の同時多発テロへの「戦争」対応に発展した。本来が自己主張の国なのだ。

古来「謙譲」をもって美德となし、「和をもって尊しとなす」日本とは対極の国である。そのアメリカが今や世界最大の権力国家となり、その思想のみならず価値観を半ば強制的に世界に輸出しているのだ。その結果は 21 世紀にいたって、世界中の多くの人間、多くの国の最大の関心事が、自らの幸福、自国の利益となってしまった。20 世紀の終わり近くには確実に、「地球は一つ」「人類大家族」の意識が世界中に広まりつつあったのである。しかし 2001 年の同時多発テロに対するアメリカの戦争宣言によって、この気運は一気に葬られてしまった。

強い政治家といわれる人たちは一般に自己中心的であり、その政策は国益中心的である。だが、それはもはや時代に逆行しているといわなければならない。偏狭な政策は偉大な政治家の考えることではない。哲人政治家は時には歴史的時間を忘れないといけない。

最も偉大なアメリカ人：リンカンとソロー

アメリカで最も偉大な人物とされるのが 16 代大統領エイブラハム・リンカン(1809-65)である。今や民主主義の定義ともなった「人民の、人民による、人民のための政治」で知られる「ゲティズバーグ演説」は、『独立宣言』からほぼ百年後の南北戦争の最中でなされた。

そのエイブラハム・リンカンが、おおやけの演説ではなく、ノートにしるした「神の意志についての黙想」に、その真情を吐露している。「共和党も民主党も、その意図するところが、神の意志にかなっているようには思われない」と。さすがに、歴史的時間を越えた発想である。2009年は彼の生誕200年である。

同時代のヘンリー・ソローは『ウォールデン（森の生活）』で知られる作家だが、『市民としての反抗』で奴隷制やメキシコ戦争を激しく批判し、戦争に税金を使うなら自分は税金を払わないとして納税を拒否し投獄された。マサチューセッツ州はコンコードの刑務所に彼を見舞った師のウォルド・エマソンが、「ヘンリー、お前はそんなところで何をしているのだ」と訊ねると、「先生こそ、そんなところで、何をしているのですか」と問い返した。ハーヴァード大学時代、ソローの師であったエマソンは、インド・中国の古典を愛読し、自然を通して人間が神と語る喜びを説いたキリスト教の説教師であったのだ。

それから1世紀半、我々は今なおリンカンやソローと同じ時代にいる。いまだにそこから進化できないでいる。意識変革がなされないのだ。このような時代にあって、世界中の教師は、暴力や殺人や戦争の悪を、いかに子供たちや学生たちに教え、納得させたいのか。いかにして生命尊重や、全人類の「共生」を教えたいのか。

21世紀人類共通の価値観

21世紀、人類はこれまでとは違った新たな価値観や、その実現のための方法・方策を持つ必要に迫られている。それには先ずリーダーたち、特に世界をリードする政治家たちの意識改革が求められている。企業においてもトップの考えで99パーセントが変わるといわれる。

世界人類の「共生」、そのための「絶対平和」が強固な決意を持って求められなければならない。戦争は最大の環境破壊である。殺人行為である。戦争は悪である。このことを改めて確認すべきときだ。戦争を発議し、それを実行する者は、悪人である。

「絶対平和」「万人の幸福」「自然との共生」この強い決意なしには、21世紀の世界的リーダーたりえないであろう。同時に、一人一人の意識の変革も求められる。世界人類とすべての文化の尊重、自由意志に基づく創造的生き方、そこから生まれるすべての文化の調和と融合。教育のモットーとしてこうした活動が認められなければならない。

現代ヴェトナム文学の代表作、バオ・ニンの『戦争の悲しみ』が、発表後まもなく『愛情の定め』と改題を余儀なくされた。このようなヴェトナムの状況は、わが国においてもかつて見られたものだ。最近の戦争映画やテレビの戦争番組の増加は、何を物語るものであろうか。

現代日本の社会状況

NHKの大河ドラマが戦国時代の愛情を美化して見せた後で、最後に「戦争はなくならないのです」と結論付ける時代になった。「そのとき歴史は動いた」も同じ流れを感じさせる。

ナレーターが戦闘場面を感動をこめて美しく語るのだ。ロングランの舞台でも、音楽や舞台装置の美しさにだまされてはならない。復讐劇は時代遅れにしなければならない。

知らず知らずのうちに洗脳を余儀なくされるテレビ番組やマスメディアのあり方に、我々はもっと注意すべきであろう。どのような方向性にもっていくか。未来はどのようにあるべきか？ 子どもたちに与える影響は、学校教育の何倍も大きいのだ。

私は英語英文学の教師を半世紀近くやってきた。その中で、この 30 年ほどは、シェイクスピアの戯曲に、私なりに手を加え、能に翻案して上演してきた。古典に描かれた人物たちの生き方が正しいわけではない。教科書で教えるときにそこは教師が十分注意しなければならないところだ。文学は教えられないという文学教師が多いが、それは理念とか生きる目標を持っていないからだ。万人に共通の価値観を持っていないからだ。教育においては、結果よりも目標が大事である。結果がすべての現代社会に、教師は毒されてはならない。

古典の主人公たちは人生のモデルではない

過去の繰り返しや模倣には進化はありえない。古典の主人公たちが人生のモデルではないのだ。古典だからといって、それを間違えてはいけない。ハムレットの恋人オフィーリアをまねて、捨てられたからといって（彼女の誤解だ）川に飛び込んで自殺してはいけない。ロミオやジュリエットのように、愛する人が亡くなったからといって、服薬自殺してはならない。オセローのように、言葉巧みな部下にだまされて、無実の妻を絞殺してはならない。マクベス夫人は、夫をスコットランド王にすべく、王殺しをやったのけた。それを夫への愛情と間違えてはならない。リア王のように、財産分与に際して、父上だけを愛しますと公言する娘たちにだまされて、愛の公言の出来ない娘を勘当したりしてはならない。

読書に、演歌に、歌謡曲に、あらゆるそして現代の芸能に、その言葉に、舞台装置の美しさに、旋律に、酔わされ、毒されてはならない。美化された戦争体験にだまされてはならない。『ハムレット』ははじめ古典の多くは、失敗の人生を描いて見せているのだ。過去の歴史の大半は失敗の記録なのだ。先人の失敗を繰り返してはいけない。かれらの失敗の過去を、わたしたちは未来に生かさなければいけない。さもなくば人類の進化はない。

教師はこのことを生徒たちにしっかりと教えなければならない。教師自身がその自覚がなければならない。歴史を繰り返してはならない。

イブセン『人形の家』と新作能『ふたりのノーラ』

2005 年は、ノルウェイと日本の修好条約締結百年の年であった。そして翌 2006 年は、ノルウェイが世界に誇る劇作家イブセンの没後百年であった。また 2006 年はアイスランドと日本の国交樹立 50 周年という年でもあった。それら周年を記念すべく、2 年にわたって、新作能『ふたりのノーラ』（*Double Nora*）（毛利三彌・上田邦義作演出、名取事務所）が、文化庁その他の支援を得て、北欧各国で公演された。イブセンの代表作『人形の家』を能と新

劇のコラレイションに翻案したものである。

近代心理劇の嚆矢とされる自然主義演劇の『人形の家』が、能に翻案できようとは、誰も想像しなかった。しかし私は2000年に東京両国の劇場「シアターX」で、毛利三彌訳・演出の『ノーラまたは人形の家』を観て、これは能になると確信し、ぜひこれを能に翻案して、作者の故国ノルウェイでも上演し、かの国と日本との友好増進に役立てたいと願ったのであった。

イブセンの『人形の家』は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、近代家庭の崩壊の劇として、また「女性解放」の劇として、一世を風靡した。しかし作者の本意は、後年のメモによれば、必ずしも夫婦あるいは男女間だけの問題ではなかった。

イブセンは人と人との本当の心のつながりを問題にしていたのだ。どうしたら夫婦は、男女は、人間同士は、本当に愛し合うことが出来るのか。どうしたら愛の継続は可能になるのか。創作能『ふたりのノーラ』の作者としての私の意図もそこにあった。21世紀を迎えての、人間関係における意識変革の必要を訴えたかった。

「この八年間私たちは夫婦だった。しかし真面目な話をしたことはただの一度もない。今夜が最初。そして、これが最後よ」と語り始めるノーラの切ないせりふを、私は能の地謡に、しみじみと謡ってもらいたいと思った。自分の仕事のみが生き甲斐で、妻の人生など一度も考えたことがない、愛とは何かわからないという夫たちに、ぜひこの劇を見せたいと思った。人と人との本当のつながりについて観客のひとり一人に真剣に考えてもらいたいと思った。

案の定、ノルウェイでもスウェーデンでも英国でも、多くの観客は涙をこらえて舞台を見つめていた。日本語であったにも拘わらず、多くの観客には分かったのだ。静かに、心をこめて謡ってもらったのだ。

「私が身も心もすべてを捧げてあなたを愛したとき、あなたは何一つ理解しなかった。ただ楽しんだだけ。あなたの愛は自分に必要というだけ」

愛するとはどういうことか

仮に「愛している」と言えたにしても、本当の思いやりの心や行為がないところに愛はない。また、主人公ノーラの夫のように、自説をもって相手を説得しようと思っているところには、本当の対話や話し合いはない。強者と弱者の場合には、強者はまず弱者に耳傾けることが必要である。

「対話」のまえに「聴話」が要るのだ。聴話なしには相手を理解することは出来ない。初めから自説を理解させようというのは、相手を尊重していないのだ。そして理解できた場合、お互いの納得や満足の行く結果を得るには、時には自説を曲げてでも、ときには自分の価値観や信念を放棄してでも、相手の説や信念も受け入れる、それくらいのおおらかさ無しには、本当の心のつながりはあり得ない。

相手も自説をもち、信念をもっているなら、まずそれに耳傾け、受け入れる基本的態度な

しには、心のつながりはでき得ない。自分だけではなく相手の幸せもいっしょに考える、その態度が必要なのだ。愛情があるなら、女性の長話も聞いてあげなければならない。静かに、冷静に、数学の問題を解くときのように、正解を求めることだ。誰が聞いても、正解だったと認めてくれるような。歴史が後に評価するような。

相手と異なる自分の信念、価値観、宗教を唯一最高と思い込んでいるところに、本当の心のつながりはない。本当の信頼関係すなわち愛は成立しない。「美しい国」とは、お互いの信念や価値観を認め合い、共有することができる人々の集う国ではないだろうか？ またこの心のつながり無しには、本当の教育はなされ得ないのではないだろうか。この基本に基づいてなされる教育こそ、「美しい国」の教育ではないだろうか。

私の教育観・教育法

私の教育観は端的には、知識を授けることと、相手のいいところを見つけてそれを指摘し育てることである。私はそれほど「善し悪し」を教えようとは思わない。これについては後に述べる。

私はいま、義務教育を中心に考えている。ということは、基礎学力、プラス人間教育ということになる。

基礎学力は、中学を卒業して社会に出た場合でも、余り困らずに生きてゆける最低の知識である。国語、算数、理科、社会、芸術科目、家庭科、保健体育、英語、ほかパソコンは必須である。その他、地域や年齢などによって必要なものがある。

あくまでも、子どもたちが身につけていないと将来困るであろうという視点での基礎知識である。強制はしない。また、「必ずしもみな覚える必要はない。でも、どこに何が書いてあるかだけはしっかり覚えておきなさい」と言えればいい。

しかし、メールを送るにも、何か仕事をするにも、誰かを助けてあげるにも、文字が読めず計算ができず、文章が書けなかったり、英語が話せなかったりしたら、それができないとわかれば、それが動機づけになる。

「勉強は自分のため」は動機づけにならない子が多い。しかし「誰かを助けるため」「愛することは助けること」と分かれば、やる気がでる。この教育心理がわかっていない親や教師が多い。「えらくならなくてもいい」と思っている子が多い。それでいいと思う。その子たちが「困っている人を助けるため」なら勉強する。生きがいを感じる。素晴らしいことではないか。褒めてあげたい。日本ではそういう素晴らしい子たちが増えている。

こういう子たちは、大人たちの自己中心な生き方にうんざりしている。言行不一致に、競争主義の人間としての低級さに、拝金主義に、あきれて物が言えないでいる。「何が勉強しろだ。学力だ。そんな大人の言うことなんか、聞くものか」ということになる。

教育は褒めることである、という考え方がある。家庭教師を含め半世紀以上の私の経験からも、その通りと思う。

学校でも家庭でも、とにかくいいところを見つけて褒めてあげる。これが自己発見に通じる。長所を見つけ、伸ばし、育ててあげる。長所があっても誰かに指摘されなければ、自分では分からないことが多い。いつも叱られてばかりいる子が、褒められて生きがいを感じる。それが将来の職業選択のきっかけにもなる。私事になるが、自分のこれまでの人生で一番嬉しかったことは、ブライズ先生に褒めていただいたときのことである

なお、基礎学力であるが、これは絶対的なものではない、とつけ加えておく。諸般の事情から通学できなかったら、それでもいいのだ。(くらいのおおらかな気持ちをもちたい)。叱ってはいけない。この心得は親にも教師には大事なことだ。もっと大事なことがある。

義務教育と人間教育

もう一つの人間教育である。ことの「善し悪し」を教えることである。しかし正面からではなく、それとなく教えてあげたい。一番大事なことはあるが、科目として教えるとなったら、ただの知識になりかねない。教える側にも問題がある。まして成績がつくとなったら暗記ものになる。偽善者を作らないよう、教師も偽善者にならないよう。もし、自分が教える立場になったら、知識として割り切って教えるか、である。

最善の方法は、教科の授業の合間合間に脱線したかのごとくに教えることであろう。ブライズ先生の鉛筆落し(「ノブレス・オブリージュ」(高い身分のものは、常に下の人に仕える用意が必要)を皇太子に教えられたときのこと)のように。そしてなぜそれが良いことなのか、なぜそれが美しいのかを説明して、納得させることである。

さて問題は、「善し悪し」の悪い場合のことである。それが絶対に悪い場合と、状況による場合とがある。したがってこうした場合は、なぜそうなったのかを先ず聞かなければならない。一方的に頭ごなしに叱りつけたら、理不尽と思われかねない。(同時多発テロの場合がそうだ)。原則としてまずは「聴話」(hearing)が必要である。聞き役に徹することである。なぜそうしたか、など。(多忙を理由にこれができなければ、そこで心は切れてしまう)。それから話し合いになる。これで大抵は解決のめどが立つ。どうしていいか分からなかった場合には、教えてあげることになる。ただし、こちらにそれだけの智恵と判断力がある場合である。決め付けないようにしないといけない。「人間は過ちを犯す動物」(アレグザンダー・ポープ、18世紀英国詩人)であるから。こちらが話のわかる人間とわかれば、相手も本当のことを話す。相談に乗ってほしいという気にもなる。とにかく決め付けられないことである。

高校以上は義務教育ではない

高校以上はもう義務教育ではない。勉強したいことを勉強すればいい。自分の才能を見出し引き出してくれる先生に出会えたら最高の幸せだ。科目が偏りたい人は偏ればいい。しかし将来を考えて、出来るだけ多くの科目を習っておく方が得であることは教えてあげたい。外交官や政治家で、日本の古典芸能や伝統文化に無知な人には、恥ずかしい思いをする。私

は高校の体育の時間に数時間、柔道を教わったことを何度感謝したことか。先生や友人に誘われたら、いろんなサークルに入ってみるのもいい。どこにどんなチャンスがあるかわからない。

高校以上は、選択科目が多い。いい先生にめぐり会う機会も多い。実力があって教え方がうまい先生である。厳しく優しい、誠実な先生である。科目以外のいい話が沢山できる先生である。学生が憧れるような先生である。人生は選択である。未来志向の、人生肯定タイプの、理想主義の、思いやりのある、おだやかな明るい教師に出会いたい。

大学の講義中の私語がよく問題になるが、私自身は、一人でも私語をやめない者がおれば、授業をやめて研究室へ帰ってゆく。年度の初めに、誰かが話すときは、彼または彼女の話を全員で聞くと約束してもらうのである。

この約束を守ってくれずに、私が教室をひよいと出たことが、この半世紀間に数回ある。後から学生の誰かが謝ってきた。だが1度だけそうならなかったことがあり、学生がさわいで隣のクラスには迷惑をかけたが、私はこのやり方を、クラスの人数が50人であろうと100人であろうと一生押し通してきた。今も、講演を頼まれたときにも、このやり方で行く。聴衆の中に一人でも話している人がいれば、その人の話が終わるまで、私は黙るのである。それでいつもうまく解決してきた。

学問研究はおおらかに楽しく

私がこれまでに一番大変な思いをした講演は、アメリカの保育園（ナーサリー・スクール）である。数分ごとに話題を変えないと、子どもたちは天井を見上げてしまうのだった。長い教員生活で分かったことは、私にとっては年齢が上になるほど指導は楽で、大学院が、しかも年齢・職業に無関係な社会人の通信制大学院が、それも年に1・2度のスクーリングや、月に1回程度のゼミが一番、全員に楽しいということである。今も修了生をまじえての拡大ゼミを開いている。「この数年は、あなたの人生のルネッサンスですね」「私の専門以外のテーマで論文を書いてもいいですよ」これが院生たちに対する私の指導方針である。誰もやっていないことをやろうとする学生を拒否したら、学問は広がらない。こうして2006年3月には、「女流能の研究」で、日本で最初の通信制大学院の博士も誕生した。パソコンによる通信教育が、今後ますます盛んになろう。年齢などには関係なく、やりたいと思ったときに勉強するのがいい。そして自分にあった先生を見つけることだ。

成績評価の方法

先に義務教育は基礎学力と人間教育であると書いた。そして人間教育は心に関わること、「善し悪し」に関わるものであると書いた。それは「知・徳・体」の徳に関わるものである。しかしこれを教科として教えるなら暗記物になり、むしろ偽善者をつくるものである。しかし教えなければなら場合には、割り切って、知識として教えるか、である。

さて、学校教育における成績評価は、どのようにしてなされるべきものであろうか。普通には、頭の良し悪しでなされるものと考えられている。それはもっぱら「知」であり、記憶力である。しかし私は単純にそれで評価はしない。

記憶力が弱いよりも、先見の明がない方が、人間としてもっと頭が悪いのである。例えば、そのときそのとき都合のいいそをつくとかである。また、他人の心が読めなかったり、判断を間違えたりとかは、未来に関わることである。この道を行けばどこへ行くか、わからない頭の悪さである。したがって政治家が、国家の未来を読み違えて多数の国民を犠牲にするのは、大いに頭が悪い、というのが私の評価法である。

教師も世間も、過去についての記憶力で頭の良し悪しを判断するのは大間違いである。「万人の幸福」に関わる発明をしたり、政治的判断を下すのは、優れて頭が良い人である。成績評価は「S」である。単に記憶がよいのは「B」で、努力する人が「A」である。「A」に人間的善が加われば「S」になる。また、教育的には、結果より大事なものは目的である。この判断の出来ない教師は「D」である。世間大半の教師はそうなると失職するから「C」としておく。近年の日本の政治家で「A」をもらいそうな方はどなたであろうか。「S」には新渡戸稲造、緒方貞子氏などが入られるであろうか。これから輩出する日本の若者たちは、大いに期待される。

第3章：「美しい国」の安全保障と外交方針

汝の敵を愛せよ、という教えは素晴らしい。だが、仏教では、
汝とわれを区別して考えない。

鈴木大拙

北朝鮮と国交正常化すること

アメリカが北朝鮮への態度を軟化させている。拉致にこだわる日本は6ヵ国協議で孤立化の道をたどっている。現在日本の最大の不安は北朝鮮の暴発である。未来を見据え、ここで日本がとるべき最善の道は、核や拉致にこだわらず、北朝鮮に対して「国交正常化」を提案することである。それが最善の現状打開策となる。

経済とスポーツと芸能をテコにして、「国交回復」をはかる。その過程で、拉致も核も解決される。これが日本の安全保障上の最大の不安解消の方策となる。

韓国の国際社会への登場に比べ、長い間北朝鮮は「無視」され、悪者呼ばわりされ、孤立化を深めてきた。かつて国連加盟までの中国がそうであったように、封じ込めてはならない。「北風と太陽」である。日本の方から「国交正常化」を提案するのが、北朝鮮問題解決への最善の道である。そして日本は飽くまでも、現憲法の下、「国連平和維持活動」(PKO＝

Peace-keeping Operations) に徹することを、世界に向けて宣言することである。

これを提唱し、実現するとき、安倍首相は「ノーベル平和賞」を受賞することは確実である。参院・衆院選挙の結果は、日本国民の半数以上は平和憲法を変えることに賛成でないことが明確になろう。

安倍首相は選挙結果を見るまでもなく、この度の憲法改正は見送る方が、先見の明があることになる。一国の首相として、その支持者だけでなく、広く国民世論に耳傾け、さらには国際世論をも尊重して、賢明なる判断を下すべきときである。さもなくば、終戦直後の教育界の大混乱を再来すること必定である。

1960年、安保条約成立時の日本の首相は、祖父の岸信介氏であった。その岸首相は、小学校入学前の安倍氏に、「なんでみんなが反対するのかわからないよ」と述べたとのことであるが、現在の首相も、同様のご理解であろうか。御著の結びに「語り合おうではないか」とある。しかし、そのためには、相手の話も聞き、公平（それが善である）な立場で相手の意見もとり入れる、その寛大さがなければ、語り合っても意味がない。

平和志向の国際感覚

2007年、EUヨーロッパ連合結成50周年記念大会で、議長国ドイツのメルケル首相が「自分の考えを押し付けるのではなく、みんなの考えを取り入れたい」と演説された、その人間としての大きさに各国代表は魅了されたらしい。

すべては選択である。日本の未来は、大きく首相の選択にかかっているのである。

現状を見てみよう。自民党にも野党第一党の民主党にも、護憲派も改憲派もおられる。今のままではそれぞれ党内がすっきりまとまらない。参院選か衆院選のあとに自民・民主が分裂し、政界再編がなされれば、かなりすっきりするのであろう。しかしそれで、改めて数年後に改憲選挙を行ったにしても、国民の大多数は、これまで慣れ親しんできた「平和憲法」を変えたいとは思わないであろう。国際状況がどう変わろうとも、「平和憲法」に関する限り、世論がそう大きく変わるとは考えられないのである。

主義主張や政策面から考えれば、すべての党の護憲派や福祉派が共に政権を担当することになれば、(首相はどの党から出るにしろ)、おそらく世界中のすべての国と友好関係が結べることになるのであろう。そして核の不安からも逃れられることは確実である。それが数年後であれば、アメリカも民主党政権の可能性が予想されるから、むしろ日米関係もスムーズに改善されると期待できる。我が国の安全保障と外交方針について考えるとき、これが日本にとっての最善の選択かとも考えられるのである。

安倍首相には、ご自身の「戦略」で突き進むおつもりのようなのであるが、私には思惑通りにことが運び、それが国民の幸福と「世界の平和維持」につながりそうには、どうしても思われない。むしろ「ノーベル賞の道」すなわち「北朝鮮との国交正常化」や、平和・福祉路線を選ばれるべきではないかと思う。そのとき国民の大多数は安心して、心から首相を応援する

であろう。そして国際社会からも歓迎され、尊敬されるであろう。北朝鮮と国交を結ぶ国は増えている。

第4章：「美しい国」の教育

現代に最も欠けているのは、「偉大な魂」の観念、目指すべき理想的人間像である。
それさえあれば、理想的な社会はおのずから創られるのだ。

R.H. プライズ

平和憲法の精神を守る

1945（昭和 20）年の敗戦による我が国における価値観の大転換と教育界の大混乱は、体験したものでなければ絶対に理解できない、今からは想像もできない、信じ難いものであった。「明治憲法」と軍国主義教育から、「平和憲法」と「象徴天皇制」へと切り替わったのだった。

いま安倍首相の唱える「戦後体制からの脱却」は、今度はその平和憲法と「平和を祈る」時代からの脱却を目指すというものである。戦後体制を否定的にとらえ、そこからの脱却という。それは平和憲法と「平和への祈り」の放棄とうけとられるものである。ここで安易に「教育基本法」を改定し憲法改正へ進むことは、再びあの戦後の価値観の大転換と教育界の大混乱を招くことは必須である。おそらくあの混乱の後にお生まれの方々には、首相を含め、想像もできないことである。

アメリカに追随しない

日本は軍国主義のブッシュ・アメリカ政権に追随し同調してはならない。アメリカ国民の大多数は、2001年9月11日の同時多発テロへの大統領の「戦争」という対応を、いまとなって激しく責め立てている。しかし彼ら自身共鳴したのではなかったか。そして報道機関は、世界中が平和になることを夢見て歌ったビートルズの「イマジン」を放送自粛までしたのではなかったか。その判断の間違いに数年後気づき、その愚かさを今となって激しく恥じ、後悔しているではないか。しかし大統領の横暴さや自己中心は、言葉遣いの無神経さと共に、多くのアメリカの知識人がつとに指摘していたことである。

「絶対平和」と「万人の幸福」をモットーに

何事に対しても決して武力で対応してはならない。決して軍国主義に走ってはならない。日本は唯一の被爆国として、世界に向かって「絶対平和」と「万人の幸福」を叫ばなければならない。武力を伴わない「国際貢献」を考えるべきだ。日本がこのモットーを叫ぶとき、

その声は切実なものとして世界にこだまするのだ。武力によらない平和維持に欠かせないのは近隣諸国の信頼である。近隣諸国を始め、アジア諸国の、そして世界中の信頼を得ることである。すべての国と国交を持つべきだ。「絶対平和」と「万人の幸福」さらには「自然との共生」この大理念を政権の柱としモットーとするとき、日本中の教員や教育関係者は生氣を取り戻し、生き甲斐を感じて教育に邁進できるのである。

日本中の子どもたちも理想や夢に燃えて、猛烈に勉学に励むであろう。——この大理念の実現を目指して、世界のリーダーが我が国から輩出するに違いない。これこそ世界中の戦争犠牲者への鎮魂である。これこそ 21 世紀日本の責務である。この選択は今まさに、日本国の代表者、首相の決断にかかっている。それは首相の責務である。その判断は日本の未来を、さらには 21 世紀の世界を、大きくリードすることになる。

結論

戦争は悪である。人を殺すことは人殺しであり犯罪である。一人であれ、数人であれ、数千数万人であれ、人殺しは犯罪である。いま日本はその方向へ進みつつある—そう多くの日本人は感じている。多くの外国人もそれを感じ恐れている。首相の考えておられる武力を伴う「国際貢献」は、正しいとも美しいとも思われない。それは決して本当の平和維持活動にはならない。長年の首相の個人的信念は、いまは貫かれたいではない。戦争の犠牲となった遺霊たちもそれは決して望んでいないはずだ。これは平和を願う全日本国民の切なる願いである。平和への願いは首相も同じはずである。武力をもって平和は実現され得ないことを理解して欲しい。

今日、最も現実的な、しかも近隣諸国を始め世界の国々の信頼を得る方法は、現体制での「国際貢献」である。現在の日米間の条約はそのまま維持し、行動はアメリカ追随ではない独自の活動を行うことである。なぜなら現状は、ブッシュ政権の間違った行動に同調したその継続と見られているからである。同調した英国ブレア首相の退陣演説は、誠に哀れなものであった。

海外から見て重要なことは、平和憲法体制から脱却してではなく、それを持続させ（実に、継続は力なり）、その精神を生かしての独自の「国際貢献」なのである。憲法改定は大きく誤解を招くのである。この六十数年、日本は平和を維持し、そのために努力してきた。そしてようやく信頼を増しつつあるのである。現アメリカ政府の期待に応えて憲法を改正し、集団的自衛権を行使して日本とアメリカを守り、また武力を伴う「国際貢献」を夢見ることは、多くの国の恐怖であり、日本の大多数の国民の望むところではない。

武力によらない「絶対平和」と「万人の幸福」そして「自然との共生」—日本政府がこの理念を目指すとき、日本中の子供たちは、大きな、大きな夢と希望を持つことになる。そのとき、日本の教育界は救われる。